



留め、山に登って偵察してくるといふ。3時間もたったであろうか、戻ってきたアランに笑みがない。湖には、氷塊が溢れていて安全ルートが見つからず、危険を避けるためには陸路での迂回になるが、2kmの道のりを4艘の何百キロもある大型ボートと装備・食糧を担いで6往復、つまり24kmをひたすら歩かなければならないのだ。その夜、天は情け容赦なく砂嵐をプレゼントしてくれた。テントでは寝ているというより、飛ばされないよう重しとして体を横たえている状態であった。翌朝も荷物の運搬は続く。足の裏は皮が剥がれ、痛みで何も考える余裕がない。砂嵐は朝になっても止まず、鼻も耳も口も目も砂でジョリジョリだ。

最終日 / 時も川も静かに流れていった

川下りの終盤はノンビリとしたものだった。川の両側に氷河はすでになく、流れは広く穏やかになって、河口に近いことを教えてくれた。こんなところにカワ

ウソのペアがいて、愛くるしくこちらを向いて草むらに消えていった。

明朝やってくる迎いの飛行機を待つために、小さな飛行場の傍らで最後のキャンプだ。女性のメンバー数人が、清流の水をビニール袋に汲んで日射で温め、洗髪している。

小さな広場の砂利の上になんとチドリの営巣があり、親鳥が擬態をして我々が近づくのを必死で防ごうとする。旅の終わりに、この川を取り巻く巨大な自然の中で、足もとにあったアラスカの小さな自然に出会った。

**会員ひろば
原稿募集**

緑法人会会報(みらい)では会員の方々より原稿を募集しております。

内 容 = 紀行文・詩歌・会社紹介・趣味・絵画等

文字数 = 400字詰め原稿用紙で4枚～8枚以内。写真があれば写真も付けて下さい。

お問い合わせは緑法人会事務局(電話971-5751)迄。

採用させて頂いた方には粗品を贈らせて頂きます。